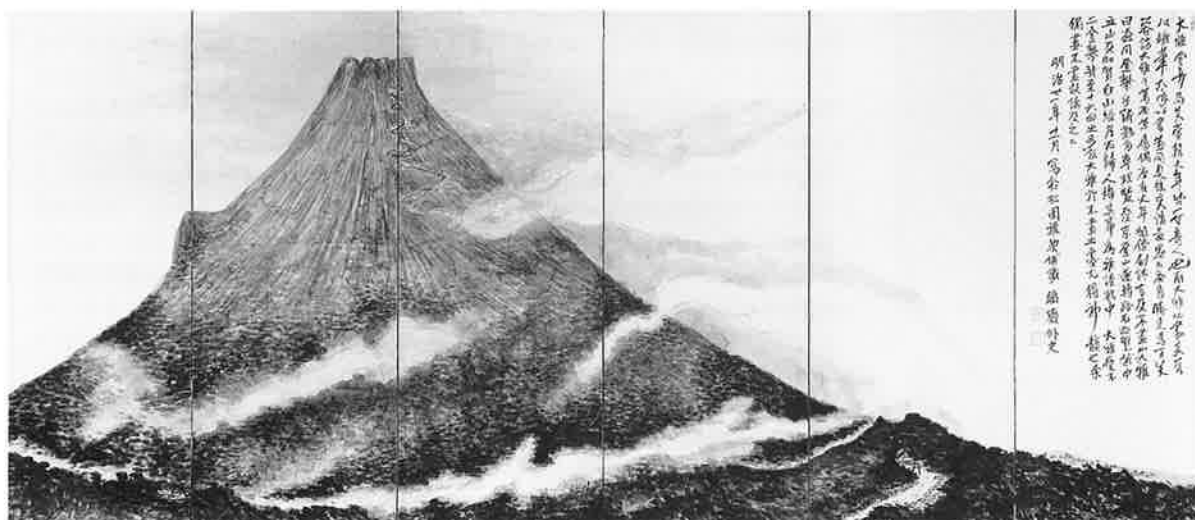


鉄斎の旅

— 富士山図屏風と桜巷堂・柴田松園 —

2012年10月16日 [火] - 11月25日 [日]

10時～16時 月曜日休館



13 富士山図

(右隻)



(左隻)

「万卷の書を読み、万里の路を行く」という文人の理想を实践した富岡鉄斎（1836～1924）は、数万冊にもおよぶ書物を読破して深い教養と高潔な精神を養う一方、北海道から九州鹿児島まで日本全国をくまなく遊歴した。天下の名勝を心に刻み、名所旧跡で調査したことを画囊に蓄え、そして持ち帰った事象を資料と照らし合わせて考証した。ときには長い歳月をかけて対象と真摯に向き合い、試行錯誤を重ねて、その成果を独自の表現として絵画世界に発露していった。

桜菴堂・柴田松園 あまた描かれた富士山図のなかでも、圧倒的な存在感を放って日本絵画史に位置する《富士山図》(No.13)。六曲一双の右隻に遠望図、左隻に山頂図をもって名峰富士の全貌を描きだすこの屏風は、鉄斎63歳の作になり、今日その名を高らしめる傑作のひとつである。右隻には「明治三十一年十一月、松園雅契の宅に於いて書き併せて識す。」との識語がなされている。これにある「松園」とは、京都市東洞院松原で唐紙商を営んでいた柴田松園（嘉永5年11月28日～昭和10年2月4日）のことで、名を治右衛門、屋号を桜菴堂といい、鉄斎の壮年のころの良き旅の伴侶として事跡年譜^[1]に名のある人物である。



柴田松園（治右衛門）

長旅をともにするほど交情が密であった関係を伝える資料として、鉄斎が松園に宛てた書簡（No.30）がある。鉄斎の書簡といえは、巻紙に奔放な書風で書かれたものが、掛幅や貼交屏風に表装されるほど造形芸術としての評価が高い。ところが現在確認されている松園宛75通のうち60通は葉書で、方寸のなかに綴られた細かな文字からは松園に対する心やすさが伝わってくる。このうち年紀が明らかなのは、明治31年から大正4年（1915）の間である。交際のはじまりは定かでないものの、家族ぐるみの昵懇の間柄であったことから、鉄斎が没するまで親交は続いていたことは確かである。書簡には、訪問の連絡や来訪のお礼、外出の誘い、作品落成の一報、鉄斎下絵になる桜菴堂製オリジナルの書簡箋（No.34）のこと、名勝図を屏風に描いた大作として《富士山図》と並び称される《妙義山図・滯八丁図》（布施美術館蔵）が、松園の仲介によって京都市不明門松原で太物商を営む安盛善兵衛^[2]へ納められたことなどが書かれている。頻繁な往来のなかで、鉄斎は多くの作品を松園のために描いて、《富士山図》をはじめ《天保九如图》(No.18)や屋号を書した《桜菴堂書》(No.19)は為書のあるものとしてしられる。



ちなみに桜菴堂の屋号は、平安時代後期、東洞院の大江公資邸の庭に大きな桜の樹があり、毎年花盛りになると歌人の能因が摂津の古曾部から上洛して桜を賞玩したという逸話によるもので、松園は町内の有志とともに桜菴会なる同好会を設け、桜のころには桜花の詩歌書画等を集めて雅会を催していた。故事逸話を手がかりに名所旧跡を調査研究し、古人の顕彰につとめることは鉄斎の面目躍如たるところであり、鉄斎は能因の肖像を熱心に探索して、桜菴会のために能因法師像を揮毫したという。そして明治43年4月には、鉄斎夫妻と松園夫妻連れだって古曾部村の能因の墓に参拝して、東洞院の桜をこよなく愛でた古人をともに偲んでいる。



松園との旅 明治31年9月、鉄斎は松園を伴って丹後・但馬方面に遊んだ。5日に京都を立ち、亀岡・園部・福知山から宮津に至り成相山に参拝ののち、鬼退治伝説がのこる大江山に登り鬼窟を探索した。加悦村に約10日間滞在して相当数の書画を揮毫し、宮津から天橋立を通り浦嶋神社等に参拝、久美浜より城崎に至り、その後、玄武洞・生野銀山を見て姫路を経て28日帰洛というルートをとった。詳細は旅行記「天橋遊記」「遊丹所見第二」^[3]に記載されており、また同33年筆になる《一咲戯筆帖》(No.15)には、成相山の一本松から天橋立の美しい景観を松園とともに股のぞきをする図など、楽しかった旅の思い出が描かれている。

この遊歴中、鉄斎は幾度となく丹後富士と称される由良ヶ岳をスケッチしている。端正な富士型をなす優美な姿は心を捉えたらしく、丹後の地で幾つかの富士山眺望図を描き遺すことになった^[4]。鉄斎は目前に丹後富士があるのにもかかわらず、旅先の感動そのままに、筆にまかせて眼下にひろがる景色を作品

30 柴田松園（治右衛門）宛 書簡のうち

に仕上げることはほとんど行っていない。ただ胸中に湧きあがるのは、23年前の明治8年（1875）に登頂した富士山の姿であった。道中、その折に信州下伊那郡浪合村にある尹良親王（後醍醐天皇の皇孫）の旧跡を弔ったことや、過酷を極めた富士登山と絶頂における清々しさを松園に語ったのであろうか^[5]。帰洛後ほどなく、鉄斎は《富士山図》屏風の構想にとりかかり、11月には松園宅において完成をみたのである。この5年後の明治36年10月から12月にかけて信州から関東方面に向かい、浪合村にて悲願の尹良親王殉難記念碑建碑式に出席して副祭主をつとめた。この時、鉄斎とともに富士山を仰ぎ見たのが松園であったことは偶然ではあるまい。

ところで、鉄斎が生涯ただ一度の富士登山を試みた契機のひとつに、池大雅への追慕の念があったことはすでに指摘されているが^[6]、23年の歳月を経てもその想いを変えることはなかった。右隻の賛には大雅、高芙蓉、韓大年ら三岳道者が連れだつて富士登山をした故事を引いて、「大雅は不二を愛し、登攀幾んど十六回の多きに至る。故に大雅、不尽の画に於いて、尤も神韻を得たり。」としている。そして左隻山頂図のお鉢巡りには、呼応するように大雅一行が描かれた。

文人鉄斎の旅の目的には各地の知友を訪ねることはもとより、地理および名所旧跡の調査、忠臣義士の遺跡顕彰など、つねに古人とともに歩み追体験することであった。三岳道者が巡覧した富士山から越中の立山、加賀の白山への行程は《池大雅高芙蓉韓大年遊岳図》(No.6)や《三老登嶽図》(No.16)に描かれ、松尾芭蕉が歩いた下野国の景は《蕉翁乗馬図》(No.12)、頼山陽が母梅麴をつれて花見に出かけた滋賀の都は《名家逸事談》(No.14)として絵画化された。いずれも鉄斎が遊歴した場所であり、その地にまつわる故事逸話を画題にして、絵地図や先人の画に拠りながら自身が調査研究したことを画面に発露していった。



16 三老登嶽図

胸中の丘壑に遊ぶ 「万里の路を行く」ことを実践してきた健脚の鉄斎が、諸国遊歴の旅を終えるのは、明治39年71歳の紀州粉河寺・根来・和歌浦・高野山への旅が最後とされる。その後も丹波、摂津、吉野、奈良など畿内を中心に短期旅行には積極的に出かけるものの、体力的な衰えは長期の旅程を難しくしていった。こうしたなかで、大正3年3月には奈良吉野に出かけて、花見を楽しんでいる。桜花満開の吉野山を遠望する《華之世界図》(No.20)の賛には、自作の詩「華を尋ねて到らざる莫し。兩歳芳山に到る。酔いては臥す雲深き処。経來る三日間。」が寄せられ、毎年花の季節を心待ちにしている心境が伝わってくる。そして没年となる大正13年の8月には、家族を連れて京都山科に遊び、葡萄の栽培を見ておおいに楽しんだという。《葡萄苑図》(No.28)は葡萄狩りに興じる人々を描き、賛には中国明代の『円機活法』巻八の葡萄の項を引いて、老いてますます行楽と勉学に勤しむさまが見てとれる。

一方、旅に出なくなった鉄斎は次第に自身の胸中の丘壑に遊ぶようになる。行動が制限されることにより精神は研ぎすまされ、画境は卓越した境地へと昇華していった。学者を自認する鉄斎の画は、その学識から、ともすればやや実証的で説明的な雰囲気帯びるときがある。歳月を重ねることによってこれらが取り払われ、視覚芸術としての詩情や装飾性が鉄斎のなかで矛盾なく融合したのである。伊勢の二見浦から遠方に富士を望む《朝晴雪景図》(No.26)、琳派の技法に倣う《浮島原晴景図》(No.27)からは、かつて山頂を極め、また幾度も仰ぎ見た富士山が、絵画世界のなかで融通無碍な存在になったことを感じさせる。

(柏木知子)

本展では、鉄斎が旅に取材した作品とともに、2011年度新収蔵品の柴田松園関係資料（書簡・版木など）を初公開する。鉄斎の旅の足あとを、名作を通してお楽しみいただければ幸いです。

[1] 富岡益太郎「富岡鉄斎年譜」（『鉄斎研究』第4～9号 1971～72）。

[2] 柴田藤治郎『参考便覧』（安盛善兵衛 1894）。

[3] 小高根太郎『富岡鉄斎の研究』（芸文書院 1944）。

[4] 『鉄斎と加祝』（与謝野町立江山文庫 2005）。

[5] 諸書に、明治8年の富士登山に松園を同伴したという記述がみられるが、根拠は明らかでない。

筆録「信濃浪合及登嶽記」（富岡鉄斎著・鶴田武良編『鉄斎筆録集成』第1巻 便利堂 1991）によると一人旅であったと考えられる。拙稿「鉄斎の富士」（鉄斎美術館『鉄斎美術館開館35周年記念特別展』2010）もこれに従い訂正する。

[6] 『最期の文人 鉄斎—富士山から蓬莱山へ—』（出光美術館 2004）、笠嶋忠幸『鉄斎「富士山図」の謎』（学生社 2004）。

《出品目録》

番号	名 称	制 作 年	年齢	本 紙 寸 法	材 質・彩 色	頁 数	
1	済勝余興図	明治 4	1871	36	11.4×212.8	紙本 着色	2 帖
	漫遊所見図				11.4×190.4		
2	高千穂峰図	明治 5	1872	37	134.0× 30.6	紙本 淡彩	1 幅
3	西遊旧詩書			30代	120.0× 28.0	紙本 墨書	1 幅
4	三津浜漁市図	明治 8	1875	40	180.2× 81.9	紙本 淡彩	1 幅
5	日本絵図	明治 9	1876	41	179.3× 96.2	紙本 淡彩	1 幅
6	池大雅高芙蓉韓大年遊岳図	明治 17	1884	49	132.2× 42.2	絹本 淡彩	1 幅
7	畝傍山御陵之図			40代	113.0× 52.0	統本 淡彩	1 幅
8	筑波山真景図			40代	136.3× 52.2	紙本 着色	1 幅
9	蝦夷人鶴舞図			40代	118.7× 45.8	紙本 淡彩	1 幅
10	嵐山秋楓図	明治 19	1886	51	161.8× 57.0	絹本 着色	1 幅
11	伊予温泉行幸図			50代	31.0× 92.4	紙本 淡彩	1 面
12	蕉翁乗馬図			50代	127.6× 50.5	絹本 着色	1 幅
13	富士山図	明治 31	1898	63	各 153.0×352.5	紙本 着色	6 曲 1 双
14	名家逸事談	明治 31	1898	63	17.0×251.0	紙本淡彩・墨書	1 卷
15	一咲戯筆帖	明治 33	1900	65	各 14.4× 24.3	紙本淡彩・墨画	1 帖
16	三老登嶽図	明治 34	1901	66	129.6× 50.3	絹本 着色	1 幅
17	蝦夷遊歴図			60代	117.4× 30.2	紙本 淡彩	1 幅
18	天保九如図			60代	206.3× 70.3	紙本 墨画	1 幅
19	桜巷堂書	明治 38	1905	70	27.0×102.7	紙本 墨書	1 面
20	華之世界図	大正 3	1914	79	140.1× 41.6	絹本 着色	1 幅
21	耶馬溪図			70代	71.3× 94.5	紙本 淡彩	1 幅
22	文字市若布刈神事図	大正 5	1916	81	100.0× 45.1	紙本 淡彩	1 幅
23	遠山雪図	大正 6	1917	82	17.4× 55.4	絹本 着色	1 面(扇面)
24	奈良八重桜図	大正 7	1918	83	44.6× 56.0	絹本 着色	1 面
25	大原邸婦図	大正 7	1918	83	141.8× 52.1	絹本 着色	1 幅
26	朝晴雪図	大正 8	1919	84	38.9× 52.3	紙本 淡彩	1 幅
27	浮島原晴景図	大正 9	1920	85	26.8× 24.0	紙本銀地着色	1 幅
28	葡萄苑図	大正 13	1924	89	132.8× 32.1	紙本 淡彩	1 幅
29	嵐山春暁図	大正 13	1924	89	16.4× 53.0	紙本 淡彩	1 面(扇面)

[書簡・資料]

番号	名 称	筆者・制作者	制 作 年	備 考
30	柴田松園(治右衛門)宛書簡	富岡鉄斎筆	明治～大正	書簡箋・葉書 75通のうち
31	「足跡遍天下」印	江馬天江刻	明治7 (1874)	扶桑木
32	蘭亭修禊図	柴田松園筆	明治26 (1893)	絹本着色
33	書簡箋・封筒等版木	鉄斎原画・桜巷堂製	明治～大正	木製
34	書簡箋・封筒等	鉄斎原画・桜巷堂製	明治～大正	紙製品

・下記の日程で学芸員による展示説明会を行います。

10月27日・11月10日 各土曜日の午後1時30分より

・次回展覧会 富岡謙蔵生誕140年記念「鉄斎と謙蔵」

会期 2013年4月2日(火)～6月16日(日)

清荒神清澄寺 鉄斎美術館 〒665-0837 宝塚市米谷字清シ一番地
TEL (0797) 84-9600
FAX (0797) 84-6699
<http://www.kiyoshikojin.or.jp>